

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

近代日本における社会運動と高知県

著者	梅田 俊英
出版者	法政大学大原社会問題研究所
雑誌名	大原社会問題研究所雑誌
巻	581
ページ	51-57
発行年	2007-04-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/2933

近代日本における社会運動と 高知県

梅田 俊英

はじめに—法政大学と大原社会問題研究所と高知県

- 1 近代日本社会運動の前史
- 2 米騒動後の社会運動と高知県
- 3 電化の進展と社会運動

まとめにかえて

はじめに—法政大学と大原社会問題研究所と高知県

よろしく申し上げます。皆様のお手元の袋には、大原社会問題研究所の案内とワーキングペーパー『地方社会運動史・労働運動史研究の現状—1990年代初頭までを中心に—』が入っています。後者は、荒川章二・横関至・大野節子・梅田俊英の4人により結成された大原社研のプロジェクトチームによる研究結果です。すでに10数年前に雑誌に発表されたものを2005年にこのような形で公表しました。それは、いわゆる「平成の大合併」による県史・市町村史編纂の動きが各地にあり、私どもの研究がいささかでもそれに資すればと考えて発行したものです。もちろん、高知県についての研究動向も同書にはありますので、他県との比較の上でご参照いただければ幸いです。

さて、最初にお話したいのは高知県と法政大学と大原社会問題研究所との関わりについてです。戦前の高知に弁護士の水野吉太郎という人がいました。1910年に水野は、「伊藤博文殺害犯」とされる安重根を弁護しました。水野は、伊藤殺害には「義挙」の面があり、死刑は不当であるとしたのです。

水野吉太郎は1874年、高知県に生まれました。和仏法律学校（現、法政大学）卒業、ボアソナード民法を擁護して民法典論争に参加した梅謙次郎（和仏法律学校学監）の弟子の一人です。1890年

*2006年10月21日～11月26日、高知市立自由民権記念館において、高知県社会労働運動史展が開かれた。主催は同記念館、共催は法政大学大原社会問題研究所、賀川豊彦記念松沢資料館、大阪社会運動協会であった。このうち、特別記念事業として、11月11日、記念講演「近代日本における社会運動と高知県」が、講師：梅田俊英法政大学大原社会問題研究所研究員によって行われた。本稿は、この講演を元にして、それを加筆・補正したものである（編集部）。

弁護士試験に合格、1900年高知市で弁護士事務所を開業します。のち、衆議院議員（政友会）となります。青年たちに植民地領有のむなしさを説いたといわれています。1947年高知市で没、享年74歳でした（『高知県人名事典』ほか参照）。なお、和仏法律学校は自由民権思想の拠点といわれていました。民権運動のメッカ・高知出身の水野はそれで同校を勉学の場として選んだのではないのでしょうか。

法政大学経済学部教授・萩原進先生は、水野について次のように記されています。

「仁荷大学校の学生に、「水野吉太郎という日本人のことを聞いたことがありますか」と問うと、こんな答えが返ってきた。「韓国のテレビドラマに出てくる日本人は、たいていは悪役なのですが、水野吉太郎だけは例外で、肯定的に描かれています。最近見た安重根のドラマもそうでした」と。」（萩原進「安重根記念館を訪ねて－水野吉太郎のこと」雑誌『法政』1997年2-3月号）

ところで、大原社研は正式には法政大学大原社会問題研究所といいます。大原社研は、1919年、倉敷紡績社長・大原孫三郎によって大阪に設立された民間学術研究所です。大原孫三郎（1880～1943）は、日本人最初のキリスト教社会事業家の石井十次の影響下に社会事業に取り組んだ実業家であります。大原は倉敷紡績で「労働の理想主義」を目指したといわれます（クラブウホームページより）。大原社研は戦後まもなく、法政大学と合併して法政大学大原社会問題研究所となって現在にいたっています。

また、大原は、1930年岡山県倉敷市に大原美術館を設立します。これは日本最初の西洋美術館です。大原は、画家の児島虎次郎（1881～1929）を信頼しヨーロッパに派遣して自由に買い付けさせました。それがグレコであり、ゴーギャンだったわけです。グレコの「受胎告知」が日本にあること自体「奇跡」といわれています。大原社研を紹介する時に、あの大原美術館と同じ人が作ったと言うと、通りが良いということがあります。

大原社研の活動を若干紹介したいと思います。創立当初から『日本労働年鑑』を刊行し続けるとともに、社会問題研究を行いながら、バッジ・旗・ポスターなどの現物も蒐集してきました。高知市立自由民権記念館の今回の展覧会資料のいくつかは大原社研所蔵のものであります。同研究所には高知県の社会運動家・安芸盛の普選ポスターなど、高知関連の史料もかなり収蔵されているからです。

なお、戦前のポスターは、労働組合団体・普通選挙・産業福利協会（内務省外郭団体）などのポスターが2700枚以上収蔵されています。2000年には大原社会問題研究所ホームページ（OISR.ORG）で画像を公開し、2001年には大原社研編・梅田俊英著『ポスターの社会史 大原社研コレクション』（ひつじ書房）が刊行され、同書でCD-ROMによりポスター類が公開されました。

以上のように、自由民権運動の源流である高知県と法政大学、大原社研とは浅からぬ関係があるといえましょう。

1 近代日本社会運動の前史

つづいて、若干教科書のような話になるかもしれませんが、近代日本の社会運動の前史について述べたいと思います。皆様誰もがご承知の通り、1874年に板垣退助ら民撰議院設立建白書を左院に提出し自由民権運動が開始されました。運動の結果、1881年には国会開設の詔が出され10年後に議

会を開くことが約束されました。同年には板垣らにより自由党が結党されています。ところがこれ以後「松方デフレ」・増税の中で84年には「激化諸事件」が頻発します。群馬事件・加波山事件・秩父事件などがそれです。このなかで自由党は解党します。その後、87年に大同団結運動がおこなわれ、同時に三大事件建白運動で盛り上がりを示します。こうして90年には自由党は立憲自由党（91年自由党と改名）として再組織されました。

これ以後94年には日清戦争が起こりまして、その前後から産業革命が進展します。このなかでいわゆる社会問題が発生します。社会問題・労働問題が識者からも注目をうけるようになるのです。このころ、高山樗牛らの総合雑誌『太陽』が「社会欄」を設けました。また、横山源之助は「余は日清戦役を以て労働問題の新紀元と為す者なり」と述べています。こうした中で、自由党のメンバーも社会問題に関心を持つようになったのです。1891年、立憲自由党機関誌『自由』に主筆江口三省が、初めて「社会主義」の記事を掲げました。さらに翌年には『自由』記者上野岩太郎らが「社会問題研究会」を組織します。ところがこれは板垣退助の機嫌を損じて自然解消してしまうのです。このあたりには板垣の思想的限界が現れていると言えるかもしれません。1900年元の自由党員たちで立憲政友会が結成されると、板垣は事実上排除されてしまいます。彼は政治家向きではなかったのでしょう。しかし、余生を社会福祉事業に打ち込みます。その点では偉い人だったと思います。

さて、日清戦争後には日本において労働運動が起こり、1897年には労働組合期成会が結成されました。このなかで同年、普選運動家中村太八郎らにより社会問題研究会が結成されます。これには幸徳秋水も入会しています。翌年同会メンバーの数を絞って社会主義研究会となります。さらに1900年には同研究会は、名称を社会主義協会と改めます。こうして1901年に社会民主党が結成されたのです。5月18日に結党・19日に届出・20日に禁止となっています。つまり、即日禁止ではないのです。たった1日か2日ではありますが、日本において初めて社会主義運動の組織が存続したわけですから。

1903年のころになると、日露戦争の可能性が出てきます。『萬朝報』は当初非戦論の立場にいたったのですが、世間が戦争肯定に傾くと主戦論に転換しました。このなかで同紙記者であった堺利彦らは退社して平民社を結成し、非戦論を展開します。社会主義運動の高まりに対して政府は鎮圧の姿勢を強くし、04年には社会主義協会の結社禁止を命じました。ところが、そのころは「桂園時代」で西園寺公望が内閣を組織していました。西園寺はフランスに留学した後、民権運動の新聞に関係しました。社会主義者らはその西園寺ならもしかすると結社を認めるかもしれないと、1906年日本社会党の結党届出を出したら、はたして認可の命がおりたのです。こうして日本社会党を中心とする運動が活発に展開されました。しかし、翌年同党第2回大会で田添鉄二らの議会政策論と幸徳秋水らの直接行動論が対立し運動は激化していきました。そのなかで同年日本社会党の結社が禁止されてしまったのです。しかし、運動はさらに激化しました。こうして1908年6月赤旗事件が起こります。「無政府」「無政府共産」と書かれた赤旗を街頭で振り回しただけのことです。これにより大杉栄・荒畑寒村・堺利彦・山川均ら14人が検挙されました。たかがこれだけで1～2年の懲役となったのです。運命は皮肉なもので、そのため大杉らは大逆事件には巻き込まれず、検挙されたが釈放された管野スガは大逆事件で死刑となりました。

ところで、当記念館の展覧会会場に大原社研所蔵の赤旗が展示されています。これはもちろん赤

旗事件のものではないのですが、作りがたいへんよく似ています。おそらく赤旗事件と同時期に作成されたものでしょう。赤い布地に白いテープが貼り付けてあります。その端には「堺」と糸で縫い取りされてあるのです。戦前に堺利彦が当研究所に持ち込んだものと聞いています。

1910年、宮下太吉らが逮捕され、大逆事件のはじまりとなります。6月には幸徳秋水も逮捕されました。そして、翌年1月には早くも処刑されます。秋水の墓は高知県中村市（現四万十市）正福寺にあります。碑銘は親友・小泉三申（後、政友会に属し、政界の惑星と称された。）によります。秋水の墓のすぐ横に師岡千代子のももあります。千代子は秋水の妻でしたが、09年3月離婚しています。これは管野スガが近づいたこともあったのでしょうか、それより秋水の身辺に大きな動きがあったことでそうしたのでしょうか。秋水は何か決心したようです。千代子は「形式的に師岡姓に復帰せしめられたのも、秋水のその決心の一つの現はれ」（師岡千代子「風々雨々」『幸徳秋水全集』別巻1、明治文献、1972年）だったといます。千代子に累が及ばないように離別したのかもしれませんが。同じ幸徳家の墓域に「師岡千代子の墓」があるということを一一般の方はなぜかわかりません。「千代子って誰？」でしょう。今では幸徳秋水の墓は、高知県にとっていわば「観光スポット」ですから、解説のプレートなどがあるといいかと思えます。

こうして明治の社会主義運動はいったん収束し大正期にはいります。1912年には友愛会ができ徐々に運動が復活していきます。この過程はご存じの方も多いいと思います。1917年にはロシア革命があり、12月には社会主義者の雑誌『新社会』で山川均がロシア革命の第1報を伝えます。ロシア革命の意味が理解できたのは山川など一部の社会主義者だけだったようです。ところが、1918年に米騒動が起ると、逆にロシア革命の意味が理解されていったようです。こうして高知県でも米騒動が発生し、大正デモクラシーの運動が展開されていきます。

2 米騒動後の社会運動と高知県

1918年7月から米騒動が全国的に発生します。高知県では8月15日以後に各地で騒動が起り、3人が実刑となりました。19年2月、政友会高知支部が故幸徳秋水に感謝状を贈っています。これは中央政界では物議を醸しましたが、やはり高知にとって秋水は偉人の一人でしょう。こんなところにも大正デモクラシーの雰囲気の影響を見ることができます。20年7月に物部川水利問題で農民大会が開かれるなど高知にも社会運動の盛り上がりの兆しがあります。同年12月に日本社会主義同盟が結成されていますが、高知県では以下の3人の入会が確認できます（大原社研所蔵「日本社会主義同盟名簿」より）。高知にも明治社会主義の思想を受け継いだ人がいたということです。なお、幸徳富治は幸徳秋水の甥です。

杉駸三郎 高知県高知市外旭村
幸徳富治 高知県幡多郡中村町
栗本秀五郎 高知県幡多郡中村町

1923年に土佐労働同盟会が結成されていますが、これは侠客・鬼頭良之助の斡旋で成立したものです。侠客などが労働運動などに関わる例は全国的に見て必ずしもないわけではありません。しか

し、後に同盟会は中間派の組合同盟に引き継がれていきますが、このように労働運動の主導的な組織になったという例はないようです。1925年の上田製紙工場争議では土佐労働同盟会の指導で勝利しています。

1925年に普通選挙法が成立し、有権者数はそれまでの300万人から1300万人に増えました。28年には普選法による第1回総選挙が行われました。その結果、無産政候補者は、50万票で8人当選します。高知からは佐竹晴記（純政会）が立候補しましたが、落選しました。

ところで、選挙運動の中で立候補者の選挙ポスターが普遍的なものになりました。今回の展覧会でも何枚かの普選ポスターが展示されています。その絵柄の意味を理解するためにも選挙ポスターの法的規定を紹介しましょう。

- 1、ポスターの大きさは長3尺1寸、幅2尺1寸を超ゆることを得ない。
- 2、ポスターの色合は2度刷又は2色以下でなければならぬ。
- 3、選挙の当日は投票所を設けた場所の入口から3町以内の区域にポスターを掲示することは禁ぜられる。

つまり、大きさは新聞見開き大まで可能ということでした。ですから、現在の選挙ポスターと違って、とてつもなく大きいものでもよかったのです。しかし、色刷りは厳しかった。2色までということでした。ところが敵もまけていない。重ね刷りすることで多色刷りのように見える工夫をしたのです。

1926年3月、労働農民党が右派政党として結党されます。左派の門戸開放要求が高まる中で、労働農民党右派は脱退し、彼等は12月に社会民衆党を結党しました。また、中間派の日本労働農民党も結党されます。このなかで、労働農民党は左派政党となったのです。27年8月にははやくも社会民衆党高知支部が発会式をあげます。しかしこのときにはその勢力はたいしたことはありませんでしたが、翌年3月、佐竹晴記、氏原一郎（後の高知市長）らの「なだれ込み入党」以後、高知支部の活動が本格化します。こうして29年11月には社民党高知県連が結成されました。この前後から高知の社会運動は戦前の全盛期を迎えます。28年12月、土佐電鉄ストライキが行われています。この後の4年間の交通、製紙、製糸業ほかのストライキ参加人員は3648人で、四国4県中では最多となりました。例えば、29年3月に日本紙業ストライキが開始され、賃上げを要求しています。また、同年8月、片倉製糸・高知巡航でストライキを実施しました。

高知県の産業構造からいって、労働運動は繊維・紙業関係が中心で、外に交通関係がありました。それ以外の運動では農民運動があり、また漁民運動があったのが若干特異な特徴かと思えます。29年11月、漁民騒動が起こっています。柳原で漁民大会が行われ、器械底曳き網漁に反対して漁民数千人が県庁に押しかけました。零細な漁民にとって根こそぎ漁獲する底曳き網漁は認められないということでした。この結果、500人が逮捕されました。

社会民衆党支部のほか、29年3月には中間派の全国労働農民党の高知県連が結成されています。また、共産党系の活動もありました。30年4月には高知共産党事件が起きています。高知高校生とその卒業生らが検挙されたのです。「～共産党事件」には群馬共産党事件・名古屋共産党事件など

がありますが、高知にこういう事件があったということは左翼の活動が活発だったことを示すといえましょう。のち『間島バルチザンの歌』の作者として知られる横村浩らが出ます。しかし、36年の「人民戦線派」事件で関係者が検挙され、同県の戦前左翼運動は終了しました。たしかに弾圧・検挙によって活動は止められたのですが、思想までは消し去ることはできなかったと思います。その思想は熾火のように持ち越され、戦後の左翼運動の復活の礎石となったといえるでしょう。

以上のように、高知県では農民、漁民の切実な要求による騒動が発生しました。前述のように、労働運動では交通のほか製紙・製糸業などの軽工業での活動が活発でした。指導では安芸盛らの中間派や社民党などの右派の活動が活発だったといえるでしょう。高知では土佐労働同盟会のように地域的な組織も生まれていますが、全国政党の支部がすぐに結成されるというのは高知の社会運動における一つの特徴といえます。そのほか、高知県では岡本利吉（高知市出身）の影響下で根強く消費組合運動に取り組まれているのも特徴の一つです（高知共働社ほか）。この運動の中で、婦人部ができて同県での女性解放運動の始まりともなり、また左翼活動家も生み出したといえます。また、電灯料値下げ運動も活発に展開されました。以下にその事情を述べましょう。

3 電化の進展と社会運動

明治期から昭和初期にかけて電化が進展します。その中で電柱が格好のメディア空間となりました。1892年には初めての電柱広告が出されています。『時事新報』（福沢諭吉の創刊）の広告です。これは当時としてたいへん珍しく効果大であったといえます（おそらく外遊の経験豊富な福沢諭吉の発想でしょう）。1897年頃、産業革命の進展のなかで主要地方都市に電灯会社が成立しました。そして、大正期には電灯は全国に一貫して増加するのです。こうして昭和初期には一段落しました。このなかで民衆生活には電灯が行き渡り、電柱が都市において身近な存在となったのです。この電柱が社会運動や普通選挙のポスターを貼る場所となったわけです。こうして、電灯料値下げ運動が各地で発生します。戦前の電灯会社は小規模でした。しかし、地域独占のために電灯料が高い。こうして、値下げ運動が展開されたわけです。そのスタートは、1927年の富山県滑川町で電気料金値下期成同盟会の結成です。1928年には兵庫県尼崎市で値下げ運動が展開されました。最初は阪神電鉄（1908年より電灯電力供給事業開始）に対してで、つづいて丹波・但馬地方でも起こります。結果は要求額の半額値下げで収まりました。香川県や愛媛県などでも発生します。こうして1930年以後、ほとんど全国の府県で発生したのです。

高知県では、1928年10月佐竹晴記（社民党県連会長）らにより土佐電鉄の電灯料値下げ運動が起こされています（高知市）。1930年、安芸郡では安芸水力電気に対する値下げ運動が起こりました。大衆党安芸支部長、田中喜代馬が中心です。彼は松の木に登って値下げを要求し、「松の木男」の異名を得ました。その結果、ほぼ1割の値下げを実現したのです。電灯料値下げ運動の波は2つありまして、20年代初期と30年代前後にありました。前者は中小商工業者などの要求でした。しかし、30年代前後になると民衆のなかにも電灯が行き渡るようになり、無産政党の絶好の闘争課題となり、高知でも値下げ運動が起こされたといえます。

まとめにかえて

高知県の戦前社会運動の指導者は中間派と右派が中心だったといえます。共産党支持のグループは労農党支部は作らないで、中間派（日労党）の中にいるか学生グループのなかにいました。一方、農民運動は前述のように切実な要求による運動が展開されました。農民運動の指導者には共産党支持の全農全会派もいました（林延造や浜田勇ら）。前述のように人民戦線派事件で左翼運動は終わるのですが、高知は相対的に左翼思想とその運動は根強いものがあったといえましょう。

最後に、以上述べたうちの高知県社会運動指導者の幾人かの経歴を簡単に見てみましょう。

安芸 盛 大阪に出て印刷工 23年土佐労働同志会 中間派労働運動の指導者
入交好保 早稲田大学に学ぶ 日本労農党高知支部入党 戦後、知事顧問
氏原一郎 中央大学に学ぶ 社会民衆党入党 高知県会議員 戦後革新高知市長
岡崎精郎 岸田劉生の草土社で絵を学ぶ 全農高知県連委員長
佐竹晴記 中央大学に学ぶ 社会民衆党入党 戦前戦後衆議院議員（社会党）

上記の人々に共通しているのは、高知で生まれ育ち、県外に出て、そして戻ってきて県内の運動リーダーとなることであります。最初に述べた水野吉太郎もそうでした。このようなパターンは他県ではそれほど多くはないといえます。先進地からの運動体験の持ち帰りと、一貫した中央の運動への関心が高知の社会運動の芽を育てたとも言えるでしょう。

この背後には、古くは「遠流の国」とも「陸の孤島」ともいわれた交通の不便さもあるでしょう。つまり、そういう不便なところからポーンと飛び出て、新たな体験をして、それを持ち帰るというパターンといえます。このようにいったん飛び出て地元にもどるのは、高知が「自由民権運動発祥の地」であること、つまり高知こそ全国の中央であるという自負・プライドがあったといえるかも知れません。

（うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所研究員）